



〈研究〉貨幣經濟發展極致としての振替支拂現象

谷田，義一

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 38(6):1013-1036

(Issue Date)

1925-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053763>



研 究

貨幣經濟發展極致としての振替支拂現象

谷 田 義 一

掩はれざる眼を以て現在貨幣經濟を洞察するとき何か神秘の力が働いて、それを歩一步と一定の發展極致に接近さしてゐる様に思はれる。その接近は極めて徐々に行はれてゐる様に見えても、確實に捕らふことが出来る。その力は何であるか。その力にあづかる傾向は如何なる形式を取つて、貨幣經濟に現はれて来るか。靜かに此の問題を検討して、貨幣經濟の向ふ發展極致を探るのが本篇の目的である。

一

過去に於て貨幣經濟の發展を促がし、將來その極致への接近を導く傾向の本體を見届けるために、現在貨幣經濟の構成に就て暫らく考へ、支拂は交換と本質的に相違する所以を究明して見たいと思

ふ。

貨幣經濟の特色は個人と個人との交換取引には存しない。クナッブは其の『貨幣國定説』によりて、一定の『支拂社會』*Zahlungsgemeinschaft*を前提し、交換取引は支拂取引と區別せらるゝ所以を明にした。支拂とは財と貨幣なる一般交換財との交換ではなく、此の『支拂社會』を目標として行はるゝ中心共働的 *Metazentrisch* な行爲である。

『支拂社會』とは、クナッブの説に據れば、公的支拂社會と私的支拂社會とを意味してゐる。前者は國家であり、後者は銀行とその顧客との範圍である。従つて支拂は物の讓渡を超越して、換言すれば、交換取引を超越した『中心受領的支拂』*Epizentrische zahlung* と『銀行宛支拂』*Epitrapezische zahlung* の二つに分れるのである。何れにしても公的支拂制度に於ては國權、私的支拂制度に於ては銀行が *Regionale Leitung* となつてゐる。支拂は個人に對する物の讓渡をその本質としてゐないと云ふことは、クナッブが現在の貨幣經濟に於ける取引を個別的に存在する交換取引と見なかつたことから、發見した學的所産と云はなければならぬ。(G. F. Knapp, Die Staatliche Theorie des Geldes, 1921, 3. Aufl. SS. 138ff.)

此の點に關しクナッブ流の名目的貨幣理論を奉じて、更に新らしき天地を開いたカール・エルスターが其の著『貨幣の精髓』に於て、近世貨幣取引の中に交換取引を認める者にとつては、支拂の概念は不問に附せられてゐる、彼にとつては貨幣は財であつて、従つて支拂は貨幣なる財を他の財と交換に與ふることとなる、と看破し、貨幣支拂を交換取引と見る從來の學説を否認せんとしたる根據は、夙にクナッブによりて與へられたのであつた。(Karl Elster, Das Seele des Geldes, 1920, S. 4.)

從來の經濟學に於ては、分業と交換とが經濟組織を構成する二つの要件となつてをつた。然しながら分業は經濟的概念と云ふよりも寧ろ技術的概念であり、財の交換は既にクナツプによりて明示せられたるが如く、現在貨幣經濟に於ける經濟現象と見ることは出来ない。貨幣經濟に於ける或る個人の活動は、他の一切の人を目標として營まれる。個人は社會全體のために活動してゐる。ベンディクセンが其の著『貨幣本質論』に於て、現在の生産を特色づける言葉として「總ての人が總ての人の爲めに」Alle für alle と云つたのは、貨幣經濟に於ける生産的活動を適確に云ひ表はしてゐると思ふ。(G. Bendixen, Das Wesen des Geldes, 1922, 3. Aufl. S. 28.)

生産が社會の總ての人を目標として行はれてゐるが如く、消費も亦總ての人の活動によりて行はれる。故に消費は「總ての人が總ての人によりて」Alle von alle の原則によりて維持せられる。

斯く考察するときは、貨幣經濟に於ては個人を超越したる社會 Gemeinschaft の概念が、一つは『生産社會』として、他は『消費社會』として鮮やかに刻み出される。

『生産社會』と『消費社會』の適合は、社會主義の社會に於ては國家、若くは其他の機關により決定せられるのであるが、貨幣經濟に於ては支拂用具の流通によりて實現せられる。即ち『生産社會』の存在は社會に於ける各人に對し支拂用具獲得の地位を保證し、『消費社會』の存在は支拂用具喪失の地位を與へる。此の生産、消費の二つの社會の連結體として『支拂社會』が貨幣經濟に現はれてゐる。而して此等の三つの社會が總ての個人を超越して存在し、所謂貨幣經濟を構成してゐるのであつて、かくの如き超個人的な社會を認識せなければ、支拂が交換と異なる概念にして、物の

讓渡をその本質としないことを明にすることは出来ないであらう。

二

クナツプは支拂とは如何なる場合に於ても『社會』を前提とする過程である、*Zahlung ist ein Vorgang der jedenfalls eine Gemeinschaft Voraussetzung hat* (a. a. O. S. 138) 之は支拂現象が社會協同現象であつて、個人を前提とする交換現象と異なる所以を述べたのである。果して然らば支拂の普遍的概念は何であるか。吾々は支拂の概念を金屬秤量制と表券的支拂制に於てよりも振替支拂現象 *Girozahlung* に於て、より明らかに見る事が出来るのである。故に此の支拂の普遍概念を振替支拂現象に眺めようと思ふ。

一六一九年にハンブルグの商人はハンブルグ振替銀行を設立して、例へば各一封度に對し五九、三分の一の『銀行マルク』を定め、交付せられたる銀の一定重量を交付者の貸方勘定に入れて振替取引を開始した。此の制度は國家的の本位貨幣を用ひなかつた點に於て近代の振替制度と大いに趣を異にしてゐるのであるが、兎に角抽象的な價值單位の受授によりて支拂を決済する制度の成功したものであるとしてクナツプが特に引用してゐる所である。(a. a. O. S. 132, 133.)

振替支拂と對立するものは具體的な表券簡片による支拂である。然しながら簡片支拂と振替支拂との統一的概念が存するとすれば、それは物の讓渡ではなくして、價值單位の讓渡でなければならぬ。而して之が可能なる所以は現在貨幣經濟に於ける支拂は財の給付に對する他の財の反對

給付により個別的に行はれてゐるのではなくして、『支拂社會』に對して行はれてゐるからである。従つて支拂用具は金屬的素材を必要とせず、表券的形式に囚はれず、單に抽象的價值單位の形態に於ても完全にその職能を發揮することが出来る。此の點に於て支拂用具の概念は更に擴大せられて、振替支拂用具 *Girales Zahlungsmittel* に及ぶものである。

要するに支拂は財の給付に對して行はるゝ等價物の反對給付をその本質とせず、社會的なる支拂協同體の存在を前提として現はれる概念であつて、物的素材的要素をその本質とせず、單に抽象的價值單位による振替現象によりて特色づけられるのである。吾々は貨幣經濟の發展を促がす傾向を探り、その極致を認識せんとするに當りて、次のクナップの言葉を先づ無條件に認容したいと思ふ。

支拂は素材測定制なくして、素材發生的貨幣なくして、更に自己發生的貨幣もなく、即ち何等の貨幣なくとも可能である、——然し價值單位を譲渡す何らかの制度がなくしては支拂取引は不可能である。而して此等の諸制度の中で振替取引は考へ得べき最終のものの如くである。

Wohl aber ist ein zahlungswesen möglich ohne Anbhyllismus, ohne hygienisches Geld, ja sogar ohne autogenisches Geld, also ohne jedes Geld—aber ohne jede Einrichtung, Wertseinheiten zu überweisen, ist der Zahlungsverkehr nicht möglich; unter diesen Einrichtungen scheint der Giroverkehr die letzte denkbare zu sein. (a. a. O. S. 143.)

三

振替支拂現象の發達はマモンの寺の嚴かなる敷居を跨いで、近世貨幣經濟に附隨する新しき意味の支拂制度となつて發展した。此の制度は近代各國、殊に英米に於て手形交換所として發達した。

手形交換所の濫觴は遠く古ローマのコンペンザチオ *Compensatio* の制度に遡ることが出来る。此の制度の精神は或る人が他人に對して負ふ債務を債權によりて償却することにあつた。此の制度はリヨンの定期市場に於て著しき發達を來し、一四六三年三月四日ルキ六世の律法に於ては、一年を四期に分ち、年四回の定期市場の開かるゝことが認許せられた。前期市場の債權債務は次期市場の開かるゝ日に決濟せらるゝことが認められた。多數の銀行家が此の決濟に參加し、その手續は、先づ振出手形の引受けに始まり、之により決濟せらるゝ項目を確定し、次に勘定が比較せられ、最後に現金によりて貸借が決濟せられた。此の決濟に加入する爲めに取立てられたる保證金は二、〇〇〇クラウンであつた。銀行家はスフローによりて建てられたる美麗優雅なる殿堂に於て、年四回の決濟を行ひ、一七九三年四月、即ち凡そ佛蘭西革命前後まで繼續したと傳へられて居る。

他面に於て第十六世紀の終より第十七世紀にかけて、ゼノア人の金融上の勢力次第に加はり、ブラセンチアの定期市場が歐洲の手形交換所として活躍したことも注目せねばならぬ。

リヨンに於ける手形交換所の制度は第十八世紀に到りサバリの『完全なる商人』*Le Parfait Negociant* を通じて、各地に普及し英國に於ては一七六〇年エデンバラの手形交換所が設立せられ、

續いて一七七五年に到りロンドンの手形交換所がロンバート、ストリートに設立せられた。始めは手形交換殘高を現金によりて決済したが、一八五四年以後は英蘭銀行宛の爲替手形によりて決済するに到り、英蘭銀行に於ける各交換銀行の特別供託基金 Special deposit fund の振替作用によりて、現金受授の勞費を省略し、抽象的な振替作用が一の獨立せる持續的支拂制度をなすに到つた。更にダブリンに於て手形交換所の設立を見たるは、一八四六年にして、一八七二年には交換制度は普くイングランドの多數の小都市に及んだ。

米國に於ては一八三一年銀行家にして大藏省の秘書役たるアルバート、ガラティンによりて始めて立案せられた。一八五三年十月一日ニューヨークの主要銀行は手形交換組合を設立し、その加入銀行約五十行を數へた。尤も之より先き各銀行は各々他行にポーターを馳せて、手形上の債權債務を決済する不便を除くため各週金曜日の朝、所謂週間決済を行つたのであるが、此の制度は、ギボンスの指摘せる如く、微弱にして投機なる銀行が基礎確實なる大銀行より短期資金を借入るゝために利用せられ、手形交換の目的を遂すことが出來ず、終にニューヨークの手形交換所の設立を見るに到つたのである。手形交換殘高は一八五七年『亞米利加銀行』 Bank of America に設置せられたる共同資金 Common Fund に宛てたる鑄貨券 coin certificate の受授によりて決済せられ、現金受授を省略する手形交換制度の本性を完全に發揮するに到つた。現に米國に於ける手形交換は聯合準備制によりて極めて簡單に行はれ、一九一七年六月二十一日以後加入銀行はその法定準備金の全額を區内の聯合銀行に預入れ、手形交換殘高は同行の預金勘定の振替作用により單純に帳簿關係を

以て決濟せらるゝに到つた。(Dewey and Shugrue, Banking and Credit, p. 292.)

大陸に於ては手形交換所の發達は遅々として進まなかつた。パリーの手形交換所と雖も一八七二年までは現在の組織を完成せなかつた。ウキンの手形交換所は同年主要銀行十二行によりて設立せられ、オーストリア・ハンガリー銀行を中心として手形交換を行つた。尤も多數の個人銀行は一八六四年頃既に相互債務の決濟を行つたと云はれてゐる。獨逸に於ては一八八三年ベルリンに於て獨逸帝國銀行を中心とし、手形交換所が設立せられ、同年フランクフルトに於ても九行によりて一手形交換所の設立され、その後ハンブルグ、ストウトガルト、ケルン、ブルメン、ライプチヒ、ブレスラウ、及びドレスデンにも續々その設立を見た。露國に於ては一八九八年セント・ピーターズバーグに於て手形交換所が設立せられ、續いて一八九九年モスコ、ワルソーにもその設立を見るに到つた。斯く大陸に於て手形交換所の發達が英米に比し遅れたのは、銀行支店制度發達し本支店間の振替作用は銀行間の相互關係を薄弱ならしめ、惹いて手形交換制度の發達を妨げたる結果に他ならない。

我國に於ては明治十二年四月大阪に於て始めて手形交換所設立せられた、續いて明治二十年十二月東京手形交換所設立され、明治二十四年以後は交換殘高は日本銀行の當座預金の振替によりて決濟せるゝに到り現金受授の勞費を全く省略した。その後各地に手形交換所の設立あり、目下其の數十九に及ぶ。

かく振替支拂現象の發生は比較的近時に屬してゐるが、今や貨幣經濟の發展とともに主として手

形交換所なる具體的制度となつて現はれた。而かも流通の最も重疊する商業中心地に於ては大部分の支拂は手形交換所に於ける抽象的振替作用によりて決済せられ、抽象的價值單位の連續的移轉が近時最も重要な支拂用具の作用をなし、具體的支拂用具の使用は單に連續的な振替作用のギャップを填める補助的職能を遂たすものとなつた。かくて現實なる振替支拂制度の發展は支拂用具の本質の *Konkretum* でなく、*Abstraktum* であることを偲ばしむるに到つた。近世貨幣經濟を特色づくる支拂用具のかくの如き具象より抽象への推移は如何にして説明附くべきであるか。

四

近時異常なる發達を遂げた振替支拂現象は從來信用 *Credit* の發動であると説明せられた。信用とは或る人が他の人を信する性向、即ち信任 *Confidence* と考へられてゐる。然し信任なる人格的要素を以ては之れを完全に説明附けることが出来ない。信用學說によりて振替支拂現象を説明せんとする者は概ね、信用はその時々事情によりて作られ、事情の變化によりて變化し、從つて一定の時に於ける信用の具體的發現は事實問題として研究せられなければならぬとの條件を附加する。然し此の條件は寧ろ信用によりては完全に振替支拂現象を説明附くることの出来ない所以を暴露するものであらう。

加之、信用學說を採る者は信用の要素として信任の外に時間的要素を指摘し、此の二要素より、信用の何たるかを定義せんとする。信用とは貨幣たると財若しくは勤勞たるとを問はず、價值ある

物を、他人が將來の一定の時に於てその對價を支拂ふことを欲するのみならず、支拂ひ得るとの信任に基いて譲渡することである、この章句はタッカーが信用の本質を喝破せるものとして、後世の學者によりて廣く引用せらるゝ所である。(Tucker, The Theory of Money and Banks Investigated, p. 121.)

信用を信任となし、振替支拂現象の本質とその機能を究明せんとするには餘りに不十分である。

振替支拂現象は人格現象ではなくして、經濟現象である。詳しく言へば、振替支拂現象は現實なる貨物の流通に伴ひ、振替支拂制度を通じて自律自動なる活動をなしてゐる。而して現在に於ける金融組織は既に一定の成熟の域に達し、個人の人格的要素を脱して、それ自體に一の活動體をなしてゐる。故に金融組織活動の中軸をなす振替支拂現象を信任なる人格現象によりて説明せんとするは、その自律的活動を看過したるものと言はねばならん。

更に信用を時間に結びつけ、信用は現在に始まり將來に終るものとするは、今日振替支拂現象が時間の觀念を超越し持續的活動をなしつゝあることを忘れてゐるのである。振替支拂現象は假令抽象現象であるにしても、それ自ら一の支拂制度としての役目を演じ、時間の觀念を超越して永續するものである。振替支拂現象にはそれ自體に存在の目的が潜在して居るが故に、將來の一定時に於て、他のものによりて補充せらるゝを必要としない。振替支拂現象は之を始める行爲もなければ、之を完結する行爲もなく、從つて時間を離れて支拂作用を繰り返すのみである。

要するに振替支拂現象が具體的な支拂用具と同じく、否それよりも優りて支拂作用を遂す所以は到底信用なる人格的・時間的觀念によりて説明することが出来ない。故に吾々は眞の理由を他に

求めなければならないのである。

五

以上、吾々は信用學說を以つては到底完全に振替支拂現象を説明することの出来ない所以を明かにした。然らば此の現象は何によりて説明附けることが出来るかを探り、纏て貨幣經濟を進展せしむる力を見出さんとする爲めに支拂用具の特質を看破して見たいと思ふ。此の支拂用具の特質は既に説明したる支拂の本質が物の譲渡を要しないこと、一致するのである。

クナツプは貨幣の上位概念を支拂用具に求めた。故に歴史的過程に現はれたる、種々なる形態の貨幣は支拂用具なる上位概念によりて統一せられる。従つて支拂用具一般を歴史的に考察すれば、未だ貨幣ならざる支拂用具が存し、貨幣たる支拂用具之に續き、最後に貨幣ならざる支拂用具が來る譯となる。貨幣が果して金屬によりて鑄造せられてゐるか、又は單純なる紙片によりて構成せられてゐるか、又全く抽象的現象であるかは、支拂用具一般の特殊なる場合に外ならぬ。然らば支拂用具とは何であるか。(a. a. O. S. 2.)

クナツプは此の問に對して、支拂用具とは如何なる場合に於ても、流通的に充用せらるる可動物である、と云つて居る。(a. a. O. S. 6.)

又他の場合に於て、彼は支拂用具とは法制によつて價值單位の保持者として認められたる可動物である、と云つて居る。(a. a. O. S. 7.)

以上の支拂用具の定義に於て、彼が高唱せんとする要點の一は、流通的充用性 *zirkulatorische Verwendbarkeit* を實質的充用性 *Reale Verwendbarkeit* より峻別して、支拂用具は交換財をその上位概念としない所以を明かにした點にある。故に彼は支拂用具が財である爲めには又法律の範圍外の用途に充用し得べきもの、従つて技術の意味に於ても使用し得るものでなければならぬ、然し之は總ての支拂用具に於て然るを見ないこと、云つて居る。(H. A. O. S. 3.)

彼は支拂用具の本質を流通的充用性に求めたのであつて、それは結局に於て法律生活の一現象である。故に彼に於ては支拂用具の通用性 *Geltung* と云ふ法律的性質が問題とせられ、支拂用具を構成する素材の種類及び分量は問題とせられなかつた。

更らに附記せねばならないことは、クナツプも社會に於ける各人の流通上の二面的地位 *Amphitropische Stellung im Verkehr* を認め、人は一面に於て債務者であると同時に、他面に於て債權者であるとなし、此の二面的地位を喝破せる點に於て、流通社會に於ける債權債務關係の轉換の用具として支拂用具の作用が彼によりて暗示せられてゐる。全く金屬素材を離れて流通する不換紙幣に支拂用具としての意義を疑ふものは、此の各人の流通に於ける二面的地位を解しないのであつて、各人は物々交換に於けるが如く貨幣經濟に於ても一面的地位 *Monotropische Stellung im Verkehr* に立つものを見る結果、陷る誤謬である、とクナツプは云つて居る。

更らに上記クナツプの支拂用具の定義に於て注目すべきことは、支拂用具の保持する價值單位は素材的のものではなく、抽象的のものであると云ふことである。クナツプは價值單位を定義して、

吾々にとつて支拂の大いさが表現せらるる單位であると云つて居る。(e.g.O.S.T.)彼は價值單位が技術的・素材的基礎を離れて、名目的本性を現はしたる所以を法制史的に究明した。

金屬的秤量制の下に於ける素材的價值單位が名目化せられるのは支拂用具的債務が存在するからである。支拂用具的債務 *Lyrische Schuld* は常に價值單位によりて呼稱せられ、支拂用具によりて償却せらるゝ債務である。國家は法の維持者として支拂用具的債務を維持せねばならない。支拂用具の發展を歴史的に考察するに、支拂用具は時々國家によりて變更せられ、例へば支拂用具が青銅より銀に變更せられたとき、最早や舊支拂素材によつて定められたる債務の絶對的大いさが残るのではなく、その相對的大いさが新支拂用具的債務として残るのである。故に新支拂用具的債務は舊支拂用具的債務の條件たる支拂素材より解放せられて、實質的債務より名目的債務に移つたのである。

支拂用具的債務とは歴史的過程に現はれる支拂用具を以つて支拂はるゝ債務である。故に支拂用具の變更が實現せられたる場合に於ては、新支拂用具は舊支拂用具に回歸的に連續せられたることによりてのみその職能を遂すのである。

かくて支拂用具的債務は舊支拂用具の素材に繋つて存在するものではなく、舊價值單位と新價值單位との間に設けられたる回歸的連續 *Rekurrierender Anschluss* に依存し、新價值單位に換算せられて、不變的な相對的大いさを止めるのである。支拂用具變更の過程に於ける國家の支拂用具的債務の保全は、新價值單位を舊價值單位に回歸的に連續せしむることによりて可能である。故に國家

はその法則によりて新價值單位の名稱を命じ、新支拂用具が新價值單位によりて幾何に『通用する』*gehen*かを決定する。新價值單位は舊價值單位に對して比例的に連續し、此の意味に於て舊支拂用具の構成素材を離れて歴史的に確定せられる。従つて價值單位の概念は常に歴史的の概念であり、技術的概念より解放せられたる名目的概念である。(A. O. W. 190.)

近代貨幣經濟の所産として現はれたる振替支拂現象の根據を探ねて、貨幣經濟の進展を促す力を發見し、貨幣經濟の向ふ發展極致を究めんとする本論は上述せるクナツプの研究の二つの主要點、(一)支拂用具の流通的充用性、(二)價值單位の名目性、によりて教示せらるゝ所大なるものがある。此の二つの主要點を吟味し、貨幣經濟の進展を促し、振替支拂現象の極致に向はしむる力を見出さうと思ふ。

六

先づ支拂用具の本質は實質的充用性にあるのではなく、流通的充用性に存し、従つて社會に於ける各人は流通に於て債權・債務の二面的地位に立つて居るこのクナツプの卓見は如何なる根據の下に可能であるかを考へねばならぬ。或る財を與へたる者が、他の財をその支拂として受くる場合に於ては、流通的充用性はいづれの財にも認めらるゝことなく、單に實質的充用性が窺はれるのみである。若し現在貨幣經濟に於ける財の獲得に對して貨幣を支拂ふことを恰も財と財との交換であるを見るならば、クナツプの流通的充用性は認識せられない。財を獲得し支拂用具を以て支拂ひ、財

を與へ支拂用具を支拂はるることは、財と財との交換とは全くその意味を異にするのである。即ち、支拂用具を得たる者はその技術的性質、即ちクナツプの實質的充用性に満足するのではなくして、再び之によりて他の財を得ること、即ちクナツプの流通的充用性に満足するのである。之を他面より觀れば、支拂用具を以て他人に支拂をなしたる者は同じく支拂用具の實質的充用性を失つたのではなく、その流通的充用性を失つたのである。

かく觀するときは社會に於ける各人は不斷に行ふ支拂用具の受授、即ち支拂關係に於て、或る場合には債權者たるの地位に立ち、或る場合には債務者たるの地位に立つものである。即ち各人は財の給付に對し支拂用具の支拂を受けたるとき、その支拂用具は實質的充用性を保證するものではなくして、流通的充用性を維持するものなるが故に、將來の取引に於て社會よりその支拂用具により一定の財の給付を請求する債權者の立場を得るのである。故にその取引は交換と異なり一つ一つ完結せられて行くのではなく、支拂用具の受領者をして將來の取引に對し債權者たるの地位に立たしむるものである。此の意味に於て個人的に完結せられたる取引も支拂用具の存在により社會的には債權的地位となつて將來に向つて繰越さるゝことゝなるのである。

之と同じことが財の給付に對して支拂用具の支拂をなしたる者にも當條るのである。即ち支拂用具を以て支拂ひたる者は其れだけ若し支拂をなさないとすれば、彼が自由に享受し得る支拂用具の充用性を失ふが故に、彼れはかくの如き取引により將來に向つて、社會的に債務者たるの地位に立つのである。

かくの如くして個人と個人との間に行はるる取引は支拂用具の存在によりて個人的には一々完結せられて行くのであるが、支拂用具の流通的充用性は社會的なる債權債務の二面的地位を各個人に止めて將來の取引を連續せしむる基礎となる。而してその根據は社會に於ける一切の支拂は、交換と異り悉く社會的・普遍的支拂用具に集中せられてゐる事實に求めることが出来る。之が支拂の集中、*zentralisierung* である。

支拂の集中とは社會に於ける一切の支拂の總合であると云ふ意味ではない。一切の支拂は支拂用具に集中せられて行はるゝが故に相互に關連して、假令取引は一つ一つ完結して行くにしても、支拂は支拂用具の移轉によりて社會的に將來引續いて行はれる取引の素地を作るのである。

社會に於ける一切の支拂が現在貨幣經濟に於て、社會的・普遍的支拂用具に集中せられ、將來に於ける取引を維持してゐる事實は個人の立場より認識することは出来ない。何んとなれば個人の取引は財に對する支拂用具の受授によりて完結するのであるが、支拂用具の受授により彼が將來の取引に向つて、或は債權者の地位に立ち、或は債務者の地位に立つ關係は特定な個人に對しては無く、社會に全體に對してゐるからである。支拂用具は各個人を將來に向ひ社會全體に對して債權債務の地位に立たしむるが故に、社會的の意味を持つて居るのであつて、近時カール、エルスターが其の著『貨幣の精髓』に於て社會生産物の配分手段としての支拂用具を主張して居るのは、眞に意味深いことであるが、之も亦社會に於ける一切の支拂が社會的・普遍的支拂用具に集中せられてゐる事實より當然認識し得るのである。(c. a. O. S. 31.)

價值單位の抽象性はクナップによりて法制史的に探られたのであるが、吾々は現實なる經濟生活に於てその抽象性を明かに認識することが出来る。

貨幣經濟は無數の價格關係の總合である。價格關係は幾重にも編み重ねられて、透視することの出来ない網狀を作つて居るのである。無數の價格は相互に比較せられ、一の價格は他の價格に加へられ、又一の價格は他の價格より減せられる。價格の乗除も可能である。

無數の價格關係は絶えず變動を繰返して居る。此の價格の變動は、それを連續する脈管としての單位概念を考察することなくしては認識することが出来ないのである。ペンデイクセンの説明を借りて云へば、總ての價格は單位概念によりて連續せられ、その相對性を維持するが故に單位概念は價格の公分母 *Generalnenner* となつてゐる。

凡そ貨幣を發生史的に考察すれば、明かに一般嗜好財より發達したのである。原始社會に於て、人類の慾望を満足し得る數多の財の中、最も貨幣として適當なる資格を保持したる財が選ばれて、漸次一般的交換財の性質を荷ひ、貨幣となつたのである。かくて價值單位はその起源を財より發してゐると云ふことは、否むことの出来ない事實であらう。従つて吾々が價值單位の特性を考察する場合に於て此の發生史的立脚地をとれば、價值單位は財となり、即ち評價の對象であると云ふ結論に到達するであらう。

然しながら物の觀察に於けるヴェルデンとザインとは必ずしも一致するものではない。既に完全なる價格關係により構成せられてゐる現在貨幣經濟社會に於て、價值單位は財を離れて價格關係そのものより導き出さるゝ *Ein fester Einheit* として、吾々の思维的内容をなしてゐるものである。

故に價值單位は一の抽象概念であるが、それは確定し、それ自らは變動せぬ單位として活動してゐるのである。價格の比較も加減乗除も、又その變動も此の抽象單位により測定せらるゝことにより現はれるのである。吾々は價格の既に成立せる社會に生れた。然し吾々は價格の成立なる舊事を知らない。唯だ價格の變動なる現實を凝視するのみである。假令、價格は古き歴史の一過程に於て或る一般的嗜好財との評價によりて成立したるにもせよ、現在に於て吾々はその變動が抽象的な確定單位を通じて行はるゝ歴然たる事實を窺ふことが出来る。かくて貨幣經濟に於ける價值單位は抽象單位である。

振替支拂現象は、かくの如き抽象的價值單位の存在を前提としなければ起り得ない。而して吾々が金融中心地に於ける手形交換制度は支拂素材なくして單純に價值單位の移轉によりて實現せらるる支拂現象たるを洞察するときに、支拂の本質は物の讓渡に依存するものでないこと云ふことを認めることが出来る。故に支拂の普遍概念は、假令具體的支拂用具が用ゐらるゝと、抽象的な振替作用によりてなさるゝことを問はず、價值單位の移轉なることに存するを認めることが出来る。支拂は抽象的價值單位の移轉によりてなさるゝことを、その本質としてゐるのであつて、之を認めることなくして貨幣經濟に於ける抽象的振替支拂現象の事實は説明附けられない。之れが支拂の抽象 (*Abstrak-*

hierung)の意味である。故に支拂の抽象とは價值單位が素材を離れて名目化する過程に現はるゝ傾向である。

要するに支拂用具の社會的普遍性と、その荷ふ價值單位の抽象性とは、支拂用具によりて行ふ支拂を二つの傾向によりて特色づけた。一は支拂の集中であり、他は支拂の抽象である。此の支拂に於ける二傾向を根據としなければ、單純なる抽象的振替作用により無數の支拂の決濟をなし、社會に於ける各人をして將來の取引に向つて債權債務の二面的地位に立たしむる振替支拂現象を完全に説明することは出來ないのである。而して此の現象を信用なる人格的・時間的要素によりて説明せんとするは、此の二傾向を度外視するものとして學問的に斥けられねばならぬ。

八

以上、吾々は振替支拂現象を信用學說以外の根據より理論附けんために、貨幣經濟に於ける支拂用具の本質を探り、支拂の集中と抽象の二つの傾向を演繹した。

此の二傾向を詳細に吟味すれば、全く背馳し、相容れない傾向ではない。支拂の集中の傾向が濃厚とならざる限り、價值單位の全き抽象化も實現せられない。従つて支拂の抽象の傾向は現はれない。又價值單位が抽象化せられて行く過程は、他面に於て支拂の集中の度合の加はる過程である。故に此の二つの傾向は認識論的には明かに區別せらるゝものであるが、事實上於ては貨幣經濟を促

進する同一なる力の發露に過ぎない。

此の二傾向の中、支拂の集中の傾向は能動的なるものとして、先づ支拂の抽象の過程に作用し、此の抽象の過程は更らに受動的に集中の過程に反應し、その色彩を濃厚にするのである。

吾々が囚はれざる眼を以つて、貨幣經濟に現はれたる抽象的振替支拂現象を眺むるとき、此の二傾向の完全なる發展形式の潜在を認めることが出来るのである。

貨幣經濟に於ける支拂は個々の取引を個人の間で完結するものであるが、既に述べたるが如く支拂は社會的・普遍的支拂用具に集中せられ、各個人は將來に向つて社會全體に對し債權債務の地位に立つが故に超個人的なる『支拂社會』が認識せられる。故に『支拂社會』とは支拂が社會的・普遍的支拂用具に集中せらるる結果認識せらるる超個人的實在であつて、その存在が將來に於ける個人の取引を完結する基礎となつて居るのである。

現在の貨幣經濟は支拂用具の存在によりて特色づけられる。而して支拂用具はその社會的・普遍的支拂手段として特質より、支拂を之に集中し、而して此の集中は能動的に作用して支拂用具の保持する價值單位を抽象化し、支拂抽象の現象を現はしたのである。此の支拂の集中と、之より生ずる支拂の抽象とは貨幣經濟發展の各階段を通じて現はれた。然しその純粹なる發現は素材測定制に於けるよりも、素材發生的貨幣に於けるよりも、更らに自己發生的貨幣に於けるよりも、即ち總ての種類の具體的貨幣に於けるよりも、純抽象的な振替支拂貨幣としての振替支拂現象に、之を認めることが出来るのである。此の意味に於て振替支拂現象は久しき貨幣經濟發展の成果として、新に

現はれたる現象であり、現在貨幣經濟は將來此の極致に向つて徐々として進展するであらう。かくして振替支拂現象を基礎として立つ貨幣經濟が、その極致に進む過程が將來來るべき貨幣經濟の辿る道程である。

九

支拂の普遍と抽象の二傾向は貨幣經濟進化の道程に現はれて、之を促進する力となつたのである。即ち社會が最も原始的な物々交換を離れて、個々の物々交換が地域的に集中せられて行はれる様になつたときに、早くも此の二傾向の萌芽を見るのである。此の物々交換の地域的集中は孤立的に行はれたる物々交換の交換目的及び、その質、量の不一致を減少し、集中の程度加はるに従つて、その減少の度も加つた。物々交換の地域集中には明かに近代的な普遍的支拂用具の作用の萌芽が認められるのである。一の財に對して他の財を與ふる場合に於ても、之が集中せられて行はれる現象そのものに支拂用具の本質が内在してゐるものと云はねばならぬ。

かくの如き支拂集中は未だ支拂の抽象を伴つて居ない。然し此の支拂の地域的集中が益々普遍化せられて、一般的交換財を貨幣として出現せしむるの動力となり、貨幣經濟の發生を促進したることは明かである。かくてクナツプの素材的秤量制に於ける『社會的に認められたる交換財』*Ein soziales, sachlich anerkanntes Tauschgut* は成立し、そのときに到つて、支拂集中の傾向が一の社會現象として現はれるほゞに、普遍化して來たのである。即ち此の一般交換財は社會的流通の用具として現

はれ、技術的なる財の性質を離れて、一の支拂用具となり、一切の財は、之を支拂はなければ獲得せられない様になつた。即ち、支拂集中の傾向は物々交換時代に於ける一般的嗜好財をしてその財たる性質を蟬脱せしめて支拂用具と化し、社會に於ける一切の財は此の社會的・普遍的支拂用具に集中せられた。即ち此の推移の過程は支拂の地域的集中より社會的集中への進化の道程である。支拂用具が一般的交換財より起つて、金屬秤量制を経て近代の章券的支拂用具として現はるゝに到つたとき、社會に於ける支拂は假令個別的に行はれてゐても、一切の支拂が支拂用具に社會的に集中せられることを前提としなければならぬことゝなつたのである。社會を構成する多數の個人が行ふ無數の支拂は個々に存在してゐるのではなく、社會的に集中せられてゐるのである。

社會に於ける一切の財の受授は社會的・普遍的支拂用具による支拂を前提として行はなければならぬ。かくて多數の支拂が社會的に集中せられてゐる状態を『支拂社會』と名附けることは既に述べた如くである。

支拂の社會的集中によりて成立したる『支拂社會』の出現は、必然の結果として支拂の抽象の傾向を高めたのである。支拂用具の荷う價值單位は支拂が社會的・普遍的支拂用具に集中せられることによりて、物的性質を帶ぶる必要なく、單に任意に他の財に對する *Anrecht* を保證せられることによつて十分となり、抽象的本質を現はすに到つた。故に支拂の集中と云ふことが能動的に價值單位に働いて、之を抽象化したのである。

要するに原始的物々交換の比較的發達せる過程に於ける交換の地域的集中は多數の財の中一般的

嗜好財を摘出して、一般的交換財となすの力となり、此の一般的交換財の出現と發達とは、更らに支拂の地域的集中を破つて、社會的・普遍的支拂具に之を集中せしめた。かく歴史の各過程を通じて現はれたる支拂の集中の過程は、支拂用具が交換財たる性質を蟬脱する道程であり、此の間、支拂用具の荷ふ價值單位は、具象より抽象へ推移し、支拂を抽象化する過程をも必然的に現はしたのである。

十

吾々は支拂の集中と支拂の抽象の二傾向の極度の發展を支拂振替現象の中に眺むることが出来る。支拂振替現象は此の意味に於て貨幣經濟發展の極致である。貨幣經濟は信用經濟なる、之れと異なる別個の經濟を將來に於て實現するのではなくして、それ自らに淨化せられて、その極致たる振替支拂現象に進むであらう。既に人口増し、企業的活動の集約加はりたる地に於ては、支拂は重疊せられ、リーフマンの所謂 *Kompensationsmoment* (R. Liefmann, Geld und Gold, S. 196.) は起り、振替支拂現象は或は手形交換制度として、或は交互支拂制度として具體的に現はれて來た。支拂の集中と抽象の二傾向が將來に於て、果して如何なる具體的制度となつて現はれるかは固より學問的認識の範圍の外に立つのであるが、此の新しき制度を眺むるとき、靜かに思索する者の誰れかその出現の跡を釋ずして止むことが出来るようか。而して吾々が貨幣經濟の發達を促したる支拂の二傾向を明かに探り得るとき始めて、之を解くの鍵を握ることが出来るのである。而も此の新しき振替制度の出現が從來

人格的現象たる信用の名に眞にその理論を秘せられたるを憂ふるとき、抽象單位概念を捕捉して、貨幣經濟を眞向に凝視し、その向ふ極致を看破せるリーフマンの次の言葉は吾々の學的興味をそゝるに充分である。此の言葉を掲げて本篇を結びたいと思ふ。

交換に於ける一切の取引の基礎は國家的・具象的支拂用具、即貨幣量ではなく、所得の立つてゐる抽象的計算單位である。原始的には單に一つの評價財が一般的交換用具並に支拂用具の役目を演じ得たことは確である。然しながら特殊經濟に於ける總ての收益—後には所得と名附けられるが—が測定せらるる此の一般的費用單位並に計算單位が存在するに到るや、單位が評價財によりて具體化せられることは最早必要ではない。此のとき初めて眞の貨幣經濟時代が開始する。

Nicht die staatlichen, realen Zahlungsmittel, nicht die Geldmenge sind die Grundlage aller Umsätze im Tauschverkehr, sondern eine abstrakte Rechnungseinheit, auf die die Einkommen lauten. Es ist sicher, dass ursprünglich nur ein wertgeschätztes Sachgut die Rolle des allgemeinen Tausch- und Zahlungsmittels spielen konnte. Abersobald dieses allgemeine Kosten- und Rechnungseinheit wird, in der alle Erträge der Einzelwirtschaften, dann Einkommen genannt, veranschlagt werden ist deren Verkörperung in einem wertgeschützten Sachgut nicht mehr erforderlich. Dann erst beginnt die eigentliche Epoche der „Geldwirtschaft“ (R. Liefmann, Geld) und Gold. S. 191.